

Frances Hodgson Burnett: 『秘密の花園』の 子どもたち

田 中 瑞 枝

(1)

フランシス・H・バーネット (Frances H. Burnett 1849-1924) は、『秘密の花園』 (*The Secret Garden*, 1911) の中にそれまで見られなかった新しい型の主人公を登場させたことによって、近代児童文学に金字塔をうちたてた作家と考えられている。

これは、今も馥郁たる花園がヨークシャーの荒野のはずれに実在し、古い館から飛び出してきた子どもたちが喜々として花の手入れをしているかのように思わせる作品である。「新しい型」とはどんな意味をもつのだろうか。それはどんな古い型を超えて誕生したのだろうか。秘密の扉はすでに多くの人によって開かれてきたけれども、私はやはり自分の手で扉を押しあけ、広大な花園に放たれた子どもたちを眺めてみたいと思う。

(2)

『秘密の花園』は、今でこそ「すぐれた独自性といつまでもあせない魅力をそなえた傑作」¹⁾とされているが、イギリスとアメリカで1911年に出版された当初、その評判はかならずしも芳しいとはいえなかった。大方の批評家は、それが万人を魅了する健全な読物であることを認めたが、中には手厳しい批評を下すものもあった。

The American Library Association booklist called it “a ‘new thought’ story, over-sentimental and dealing almost wholly with abnormal people”, while realizing that it would “appeal to many women and young girls”.²⁾

1924年、バーネットの死亡記事を書いたザ・タイムズ (*The Times*) は³⁾、彼女が『小公子』の作者であるとしながら、一方『秘密の花園』についてはまったくふれなかったという。この作品は、ヴィクトリア朝の余波をうけたかなり後まで、「新しい思想」の物語」でありつづけ、「異常な人物」ばかりが登場する物語と思われていたようである。

バーネットが作家活動をしていたおよそ100年前は、いうまでもなく子どもをとりまく環境は、現在と大いに違っていた。出版社には児童図書部の類はなく、ましてや巷に児童図書館などあるはずがなかった。ちなみに、当時のアメリカでどのような本がベストセラーとして挙げられていたか見てみよう。

1884 *Heidi; Treasure Island*

1884 *A Child's Garden of Verse; Huckleberry Finn*

1886 *Little Lord Fauntleroy; King Solomon's Mines; War and Peace*⁴⁾

一見して首をかしげたくなるのは、トルストイの『戦争と平和』が、バーネットの『小公子』と同列にあるからだろう。だが、大人の文学と子どもの文学を分ける明確な境界線がなかった時代である。子どもは大人の雛型であった。子どもたちは「大人しくするように」(to make less noise) いいきかされ、朝な夕なひざまずいてお祈りを唱えることを習慣づけられていた。バーネットは幼年時代を回想し、信条のようなものをもりこんだ詩 (Verse) があったと語る⁵⁾。

Speak when you're spoken to,

Come when you're called,

Shut the door after you,

And do as you're told.

バーネットの主人公、セドリック（『小公子』）やセーラ（『小公女』）が人気者になった背景には、彼らの中に理想の子ども像を見出した大人がいたことも思い出さなければならない。

保守的な社会では、物語の中の子ども像はとかく現実をそのまま反映したものとなる。「19世紀には、子どもの本が教訓的目的をもつのは当然と考えられる時期が長くつづいた。」⁶⁾ J・R・タウンゼント (J・R・Townsend) は子どもの本の中で主に知育を強調するもの、道徳を強調するもの、何らかの理想を目指すものはあったが、喜びを与えるために書く作家はほとんどいなかった、という。19世紀で生き残ったのは、教訓主義を拒否したもの、あるいは超越したものだけである、と。

その意味では、バーネットが『セント・ニコラス』誌 (*St. Nicholas*)⁷⁾ に連載して児童文学作家として名声を高めた『小公子』 (*Little Lord Fauntleroy*) や『小公女』 (*A Little Princess*)⁸⁾ は、よい例といえるかもしれない。両者の主人公に共通しているのは、環境の激変をけなげに乗りこえ、幸せをつかみ、周囲の人びとも幸せにするとところである。今日では、いい子すぎる主人公や彼らを支配する道徳、偶然による解決やセンチメンタリズムに批判が集中する傾向があるが、それらを超えているものがたしかに存在しているのだ。起伏に富んだ筋や、人物や細部のあざやかな描写がそれである。

『セント・ニコラス』誌が、子どもの世界に教訓よりも楽しさを取り入れる編集方針をとったことを思い出せば、バーネットが執筆者に迎えられたことはうなずける。『秘密の花園』は *Mistress Mary* という題で別の雑誌に連載されたもので⁹⁾、子ども像こそ異なるが、やはり共通の要素を見出すことができる。これはバーネットの大いなる特質といえよう。

(3)

フランシス・H・バーネットは、1849年イギリスのマンチェスターに生まれた。父親は装飾用の鉄細工と銀細工を業とする裕福な商人であったが、彼女が4歳になる前に急死し、一家は経済的困窮におちいった。1864年、フランシスの一家は叔父を頼ってアメリカへ移住。家計を助けるかたわら作家修業に励んだ末、1877年に2つの小説に買い手がついた。以後、文学の道を歩むことになる。

『秘密の花園』は作家活動の後期に発表されたが、彼女の草花にたいする関心は幼いころに芽ばえたという。祖母があたえた美しい絵本 *The Little Flower Book* は、「Aはリンゴの花、Cはカーネーション…」というように、アルファベットと絵を組み合わせた「ABCの本」であった。ふたりの兄は学校へ行き、ふたりの妹は遊ぶには小さすぎるという時期で、この絵本は彼女に強い印象をあたえた。

父の死後、引越して短かい期間住んでいた家の近くに、幼い彼女は「秘密の庭」を発見した。緑の扉がついた高い塀に囲まれた庭の外で、彼女は荒れはてた庭にバラやパンジーが咲き乱れるのを想像した。

フランシスは1873年に結婚し、2児を得得てからもしばしばアメリカとイギリスを往き来して暮らした。第3番目の「庭」に出会うのは1898年、離婚してイギリスのケントに移ったときのことである。

(4)

『秘密の花園』の主人公メアリー・レノックス (Mary Lennox) はインド生まれの9歳の少女。仕事が忙しい父親と社交婦人の母親からかまってもらえず、乳母に育てられた。インド人の召使いたちの中で甘やかされた結果、彼女はわがままむすめになっていた。(……by the time she was six years old she was as tyrannical and selfish a little pig as

ever lived.) 両親や乳母がコレラで急死したときかされても、悲しむすべを知らないメアリー。ひねくれた荒れた心のままイギリスのおじのところへ連れてこられるが、そこはヨークシャー(Yorkshire)の荒野(moor)のはずれにある古い大きな館である。

メアリーがインドにいたとき、よその子どもたちは彼女のひねくれぶりをからかい、囃したてた。

Mistress Mary, quite contrary,

How does your garden grow?

With silver bells, and cockle shells,

And marigolds all in a row.

これはわらべ歌(nursery rhyme)として知られているものである。メアリーは「あまのじゃく」(quite contrary)とからかわれても別に怯むこともなく、ただ苛立ち他人を疎ましく思うばかりであった。

メアリーは枝を四方にのぼし放題、葉を茂らせ放題の一本の樹にも似ていた。心はさながら見すてられている花園のようであった。からみついているつる草を払い、はびこる雑草を除けば、花の咲く兆しがみえることに誰も気づいていない。

おじの館にある広い庭で、人なつこいコマドリにはじめて心を開いたメアリーは、気むずかしい老庭師に似たものの親しみを覚えて近づく。だが、彼女に向けられたことばは痛烈だった。

This was plain speaking, and Mary Lennox had never heard the truth about herself in her life. Native servants always salaamed and submitted to you, whatever you did. She had never thought much about her looks, but she wondered if she was as unattractive as Ben Weatherstaff,..... She actually began to wonder also if she was 'nasty-tempered'.¹⁰⁾

ヨークシャーのおじの館に舞台が移されると、あたかもサスペンス仕

立てで物語が展開していくようだ。背景がシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë 1816~1855) の『ジェーン・エア』(Jane Eyre, 1847) を思わせることは、すでに指摘されている¹¹⁾。10年間も鍵をかけられた花園の秘密。背中が曲がっているという、姿を見せないおじ。館の中で聞こえる少年の泣き声。子どもらしい好奇心に駆りたてられて、メアリーは次第に秘密の花園に近づいていく。そして、自然児ディックン (Dickon) と出会い、庭道具を手にするころ、あのわらべ歌が彼女をしきりに誘いかけているかに見える。—— “Mistress Mary, quite contrary, How does your garden grow?”

メアリーは館にやってきたころ、コマドリに「わたしもさびしいの」と話しかけはしたが、生来臆病な子どもではない。好奇心もつよいから、泣き声の主がいとこのコリン (Colin) であることをつきとめることができた。コリンは病身で、メアリーも顔負けするひねくれもの。召使いたちは彼を恐れているが、彼女は恐れるどころかみじんの同情も示さないのである。ディックンと秘密の花園の手入れをしたいメアリーは、召使いの頼みも聞き入れず、コリンを見舞いに行こうとしない。

‘Tell Colin that I can’t come and see him yet,’ she said to Martha. ‘I’m very busy in the garden.’

Martha looked rather frightened.

‘Eh! Miss Mary,’ she said, ‘it may put him all out of humour when I tell him that.’

But Mary was not as afraid of him as other people were, and she was not a self-sacrificing person.¹²⁾

コリンは後でメアリーを語るが、彼女は平然として彼とわたり合う。

ヴィクトリア朝の子どもたちに求められたのは、「柔順」さであった。今日では、我のつよい子どもの主人公はさしてめずらしくもないが、この物語が発表された当時は、型やぶりの主人公メアリーはあまり好感を

もって迎えられなかったにちがいない。彼女の能動的な性格は、作者バーネットの子ども時代のもの、あるいは抑制されていたものから生まれたといえるだろう。

コリンはメアリーと同様、親の愛情を得られない子どもだった。やがては背中に瘤ができて死ぬと信じているコリンを、メアリーは叱咤激励し外へ連れ出す。コリンはメアリーにきかされている秘密の花園を見たかったし、ディックンにも会いたかった。メアリーによればディックンは「生」そのものであった。

……she said. 'Don't let us talk about dying; I don't like it. Let us talk about living. Let us talk and talk about Dickon.……'¹³⁾

コリンは外気を吸い、父親が鍵をかけていた花園でメアリーやディックンと花を育て、花園の秘密をまもり育てる間に、心身ともに健康になってゆく。

メアリーは「花園」の扉を開くことができたが、園芸の知識がなければ花を育てることはできなかった。いや、知識だけでは片手落ちである。五感をとぎすまして、あらゆるものに自然を感じさせるようにし向けるものが必要だった。その役をディックンが引きうけた。

彼は召使いマーサの弟で、ヨークシャー弁を話す土地っ子。キジやウサギなどの小動物をわけなく手なずける——というより、彼らと話をすることができる。メアリーはまずディックンに「秘密の花園」のことを打ちあけるのである。

リスが見まもるそばで木にもたれて笛を吹くディックン。彼の登場は牧神を思わせる。メアリーにはディックンが天使のように、あるときは木の精か何かのように思われる。

Mary could scarcely bear to leave him. Suddenly it seemed as if he might be a sort of wood fairy who might be gone when she came into the garden again. He seemed too good to be true.¹⁴⁾

作者は、彼を自然の一部として描いているようだ。少なくとも善なるものをそなえた人間として。彼なしでは、メアリーもコリンも外界に心を聞くことができなかつただろう。彼の存在は大きい。「異常な人物」の多い物語に、調和をもたらしている少年である。自然児の彼もまた型やぶりで、作品を長く支えてきた人物といえよう。

(5)

1898年に、バーネットはイギリスのケントに家を借りた。そこには見すてられた果樹園があったが、彼女はそれをバラ園に生まれかわらせたのだった。玄人はだしともいえる園芸の知識は、そのときのものである。彼女は1907年にそこを離れるが、後の住人がバラ園をマーケット向けの菜園にかえてしまったときいて、大いに残念がったそうである。

「秘密の花園」は長い間作者の心の中によこたわっていた。「ABCの本」は、花園の中に移されつつあった。鍵のかけられた扉をだれに開かせようか？ 自然の美を知らない子どもがよい、荒れた庭のように心も荒れた子ども、自分の内なる力を信じられない子ども、自然をあるがままに感じることでできる子どもに、手入れをさせよう。花園がよみがえるときには、子どもの心にも同じことが起こるのだ……。バーネットは現代の心理学の発見を、誰よりも早く物語に織りこんだといわれている。

物語が発表されて74年を経た現在も、「秘密の花園」の鍵を求め、中に入ろうとしているあまたの子どもがいるはずである。ヨークシャーの「花園」は、今も明るい陽光の中で輝いてみえるのはそのためであろうと思われる。

〈テキスト〉

Frances Hodgson Burnett: *The Secret Garden* (Puffin, 1983).

〈注〉

- 1) 『オンリー・コネクト』 I (岩波書店, 1978) ——ロジャー・ランスリン・グリーン「子どもの本の黄金時代」
- 2) Ann Thwaite: *Waiting For The Party* (Scribner's, 1974), p.220
- 3) アメリカの Long Island で死去。
- 4) *Waiting For The Party*, p.95
- 5) *ibid.*, p. 6
- 6) 『オンリー・コネクト』 I 「子どもの読書とおとなの評価」
- 7) 1873年メアリー・M・ドッジ (Mary M. Dodge) によって創刊された。
- 8) *Sara Crewe* という題で連載された。
- 9) *The American Magazine*
- 10) *The Secret Garden*, pp. 39-40
- 11) *Waiting For The Party*, p. 220
- 12) *The Secret Garden*, p.142
- 13) *ibid.*, p.128
- 14) *ibid.*, p.97